

〔個人研究〕

Ratnaraksita 著 *Padmini* 研究資料概観

種村隆元・加納和雄・倉西憲一

はじめに

5～6世紀からインド仏教のメインストリームに躍り出てきた密教の、インドにおける思想および実践の展開を知るためには、聖典、註釈書、実践の手順を解説するマニュアル類などのサンスクリット語原典が基本的な資料となることは言を俟たない。しかしながら、インド密教の展開に主体的に関わった当事者たちが著したこれらの文献の多くのサンスクリット語原典が写本の形で残されているにも拘わらず、信頼できる批判校訂テキストの出版数は驚くほど少ないのが現実である。このようなインド密教の実践を知るための原典資料研究が立ち遅れてきた理由には、従来の仏教研究が教理のみを軸とする思想研究に偏ってきたことと無関係ではない。当時のインドの生きた宗教の実践のあり方を知り、教理との関連性を探る研究が依然、課題として残されている。加えて、従来のインド密教に関する研究の多くが、チベット仏教の資料に多く依存したものや日本の密教というフィルターを通したものであるため、インドで興隆した密教の教理・実践をバイアスのない姿で捉えているとは言い難いという問題がある。したがって、インド密教の正しい内容理解のためには、サンスクリット語諸文献の批判校訂テキストの作成とそれに基づく厳密な文献学的な研究が急務である。

このような研究状況のもと、種村・加納・倉西の研究グループは、インド密教を主体的に担った人物による問題意識が顕著に表れている文献である註釈文献を検討することにより、密教における教理と実践の解明を目指し、そ

のプロジェクトが科学研究費補助金の助成対象として採択されることとなった。今回、当科研プロジェクトが主要資料として取り上げ、その校訂テキストの作成および詳細な訳註の作成を目指すものは、*Samvarodayatantra* に対する Ratnarakṣita (ca. 1150–1250) の註釈書である *Padminī* である。

インド人^{*1}学僧 Ratnarakṣita が著した *Padminī* は比較的大部の著作である。Ratnarakṣita は Nālandā 僧院と並んで名高い Vikramaśīla 僧院の学頭の一人であった。チベットの歴史書『ターラナータ仏教史』によれば、彼はムスリムの侵攻によって、インド仏教が危機にさらされ、多くの学僧がネパール・チベットへ避難した激動の時期を生きたとされる。同仏教史によれば、*Padminī* はチベットで著されたとされており、それが史実であるならば、おそらくチベット仏教界に乞われて、著したのではないかと考えられよう。*Padminī* はタントラの註釈書であるが、仏教思想のいくつかの重要なトピックに対して、紙幅を大きく割いて、議論を展開し、解説している。その際、解説の終わりには決まって彼は「以上傍論は充分である (ity alam prasaṅgena)」^{*2}と記していることをみると、彼の筆に興が乗っている様が想像できよう。彼の挙げたトピックは仏教思想の中で重要な事柄、例えば「仏陀性 (Buddhatva)」や「修習の効果＝頓悟か漸悟か」などが挙げられる。こうした傍論を展開していることを鑑みても、単なる一タントラの註釈書としてだけでなく、チベット人学僧たちの教導のために著されたと考えるのは不思議ではないだろう。

当科研プロジェクトが *Padminī* に注目する理由は下記の通りである。

1. 註釈対象となる *Samvarodayatantra* と註釈書、すなわち *Padminī* 自身のサンスクリット語写本が複数存在し、それが比較的容易に入手可能である。

^{*1} Ratnarakṣita はネパール人であったという説もある。

^{*2} 第13章で展開されている議論の最後では、特に「以上過ぎた傍論は充分である (ity alam atiprasaṅgena)」と締めくくっている。

2. インド密教の最後期に著された *Padminī* には、インド密教の長い歴史を通じて論じられてきた教理・実践の関係に関するさまざまな事項が集約されている。
3. これらの事項を整理し、それぞれの事項の淵源を時間軸に沿って探っていくことにより、インド最後期の密教徒にとってどのようなソースが取捨選択されてきたのかを明らかになる。
4. そのようにトレースしたソースから *Padminī* にまでつながる糸を一本ずつ手繰り寄せて、始点と終点との差異を吟味することによって、インド密教における思想・実践の展開の道筋を見いだすことが期待される。

本論文は当科研プロジェクトによる *Padminī* 研究の序章として、先行研究、サンスクリット語写本資料、チベット語訳、そして *Padminī* と関連が深い *Sadāmnāyānusāriṇī* について概観していくことにしたい。

1 先行研究

Tsuda 1974 *Samvarodayatantra* の校訂テキストを作成する際の資料として *Padminī* のチベット語訳を参照している。

種村 2009 *caryā* という、後期インド密教においてタントラの入門者が一定の期間遵守することを要求される苦行的実践の研究の一環として、当該トピックを主題とする *Samvarodayatantra* 第 21 章 *Caryānirdeśapaṭala* の内容を考察し、あわせて Takaoka CA17、Baroda No.78 の 2 写本（本論文 p.5 参照）を用いて、*Padminī* 第 21 章のサンスクリット語テキストを校訂している。また、校訂テキストに対する註記を付すとともに、*Samvarodayatantra* 校訂本 (Tsuda 1974) の読みの訂正を提案している。

静 2012 Ratnarakṣita のもうひとつの著書『ガナチャクラ儀軌』の原典研究に焦点を定める。前半では、同著者の伝記をまとめ、彼によるチベット

語訳出・改訂作品 15 点を列挙する。とくに、Ratnarakṣita が *Padminī* をチベット錫巡中に著した後に、ネパールで生涯を終えた旨、『青冊』にもとづいて推定し、さらに 1226 年にネパールに巡礼中の Chag 翻訳師と出会っている点を併せて指摘する。後半では、まず *Padminī* のチベット訳を用いて、その中から Ratnarakṣita が「金剛乗の比丘」であることを示唆する文言を回収しようと試みる。そして、*Padminī* 第 8 章に記述される、ガナチャクラ儀軌の所作次第を和訳・抜粋して同儀軌の概観を提示する。最後に、『ガナチャクラ儀軌』を全訳し考察する。特に後者は Advayavajra の弟子 Vajrapāṇi に 4 回言及し、Abhayākara Gupta の著作 *Vajrāvalī* を 10 回引用している点から Ratnarakṣita の特色が窺われるという。

倉西 2012 *Padminī* と関連の深い *Sadāmnāyānusāriṇī* の写本について、その題名および内容を精査している。この写本のバンドルは 34 葉で構成されているが、当該テキストだけでなく、その註釈対象である *Samvarodayatantra* (第 33 章) および医学書 *Suśrutasaṃhitā* の断片が含まれている。これまで、ネパール公文書館の職員によって、写本整理の際に、その表紙に記された *Samvarodayatantravyākhyā* という名で呼ばれていたが、倉西 2012 によって、*Sadāmnāyānusāriṇī* という書名が明らかにされた。そして、*Padminī* との関係についても、それぞれの文献引用スタイルを比較し、考察している。

倉西 2013 *Padminī* が著された時期であるインド仏教終焉期に、学僧たちがどういった学術活動をおこなっていたのかについて、*Padminī* が引用する大乘仏典の傾向と引用目的に注目し、考察する。まず、引用元の明確なものリストを提示する。そして、特に、第 13 章に展開されている「生起次第の効果」についての議論中の引用に焦点を当てて、これらの引用目的について考察している。

倉西 forthcoming *Padminī* 第 13 章の主題は、インド後期密教の修習方法の 1 つである生起・究竟兩次第のうちの生起次第である。本章は他の章に比べて大部であり、前半の逐語訳部分と、後半の「生起次第という修習の効果」についての議論を展開する部分で構成されている。同論文は、その中で

も、前半部分の校訂テキストを作成し、校訂に関する註を提出している。

種村 *forthcoming* 種村は、TANEMURA 2004 における *Kriyāsamgraha-pañjikā* の校訂テキスト作成においても、*testimonia* の 1 つとして、Takaoka CA17 にもとづく *Padminī* のサンスクリット語テキストを使用しているが、当該論文において種村は、本論文で紹介したサンスクリット語写本 4 本を用いて、*Padminī* 第 22 章の後半、*pratiṣṭhā* のセクションの校訂テキストを作成した上、校訂に関する註を付している。

2 資料紹介

2.1 *Padminī* の梵文写本について

Padminī には完本のサンスクリット写本が存在する。

- | | |
|----|---|
| T | Takaoka CA17, complete, paper, 49 fols., ネパール歴 732. |
| B | Baroda No.78, complete, paper, 92 fols., ヴィクラマ歴 (?) 1983. |
| N | NAK 5/203 = NGMPP B113/8, complete, paper ^{*3} , 230 pages,
ネパール歴 1044. |
| Ra | Tucci's Collection 3.7.16; ch1–13 ^{*4} , incomplete, paper, 35 fols. |
| Rb | Tucci's Collection 3.7.26; ch18 ^{*5} –33, incomplete, paper, 41 fols. |

写本 (B) が写本 (T) のアポグラフであることは、すでに種村 2009 (25-26) に指摘されたとおりである。その他の写本に関しても、写本 (T) あるいは写本 (B) のアポグラフであることが、写本 (N) は奥書後に同じ讚嘆偈が付されていること、写本 (Ra+b) は奥書が共通していることによって、ほぼ間違いないと考えられる。

^{*3} 洋装をとっている。

^{*4} 第 13 章において引用されている *Samvarodayatantra* 第 33 章第 10 偈の途中 (yadā hi sprṣyate tatvaṃ sarvacintām acintyā) まで書写されている。そして、これは紙の途中で書写することを止めており、何らかの理由で書写最中に中断されたのであろう。

^{*5} 第 18 章途中の *śiṣyapraveśavidhi* から書写されている。

2.1.1 写本の奥書

Padminī のサンスクリット写本の奥書は、基本的に*6すべて共通している。

[T49r11, B91v7-9, N p.226 l.2-5, Rb41v6-9]

iti śrīsaṃvarodayamahātantrarājasya padminī nāma pañjikā samāptā || || kṛtir iyaṃ śrī-
mahāpaṇḍitabhikṣuśrīratnarakṣitapādānām iti śubha[m] || saṃvat 762 vaiśākhakṛṣṇā-
māvasyāyām śrījayamunilikhitāḥ sampūrṇaṃ yātaḥ || śubham ||

(▶kṛtir ... °pādānām || N では、この文を後ほど付加されている。 ▶ iti śubha[m] ...
yātaḥ śubham || TB; n.e. N ▶ °kṛṣṇāmāvasyāyām || T; corr. Scribe °kṛṣṇāvāmāvasyāyām
B)

以上、*Śrīsaṃvarodayamahātantrarāja* の *Padminī* という名の難語釈が終わった。これは
は大学者であり比丘である Ratnarakṣita 御前の著作である。幸い [あれかし]。[ネパー
ル] 歴 762 年 (≈1642 年) Vaiśākha 月の黒分新月の日に、Śrījayamuni によって書写さ
れた [写本が] 完成した。幸い [あれかし]。

2.1.2 奥書後に付された Stuti について

Padminī の写本奥書の後に、同じ筆写者によって、本尊サンヴァアラに対
する讃嘆偈 (*Śrīsaṃvarasya stutiḥ*) が書写されている。写本 (T) のアポグラ
フである写本 (BN) の 2 写本*7にも、同じく書写されている。さらに、写本
(BN) には、讃嘆偈の後に *Padminī* とは別の奥書が記されており、おそら
く、この奥書に記されている書写年代が、写本自体の書写年代であると考え
られる。それらの書写年代は、上記 *Padminī* の書写年代より 300 年ほど遅
れている。この讃嘆偈は、*Cakrasaṃvarastuti* あるいは *Herukaviśuddhistotra*
とも呼ばれ、108 の仏教讃嘆偈 (108 Stotra) の 23 番目に収録されている。
(PANDEY1994)

*6 写本 (N) には、書写年代、書写生名が記されている行が見られない。

*7 写本 (Rb) には書写されていない。

2.2 *Padminī* チベット語訳とその翻訳事情

Padminī のチベット訳 (D 1420, P 2137) は、作品そのものの奥書を提示した後に*⁸、次のような、訳者による奥書を記す。

御自身 (Ratnarakṣita) の直弟子である *Sarvajñaśrībhadrā が自ら訳された (rang 'gyur du mdzad pa) ものにもとづいて、後の時代に、無限の功徳を備えた Bla ma dam pa chos kyi rgyal po の御下知および、〔サキヤ〕 プンチェン職の Kun dga' bzang po の御言葉により懇請され、チベットの翻訳師である比丘 Blo brtan が、Phu ri の経堂で翻訳・改訂し、制定した。^{*9}

この奥書からはまず、Ratnarakṣita の直弟子として、インド人訳者 Sarvajñaśrībhadrā なる人物がいたことが知られる。rang 'gyur という表現は、訳本の奥書にしばしば登場し、インド人が自らチベット語に翻訳したことを意味する言い回しである。これにより、彼自身がチベット訳した初訳本 (未再治本) が、かつて存在していたことが知られる。この人物は *Jyotirmañjarī* と *Niṣpannayogāvalī* の訳出にも関わっており、その奥書では「インドの大学者」(rgya gar gyi paṇḍita chen po) と冠称される。また末尾に śrībhadrā を有するその名前は、Śākyaśrībhadrā と具足戒の系統を同じくすることを示唆する。

奥書は次に 2 人の人物が *Padminī* の初訳本の改訂を懇請した旨記すが、そのうちの一人 Bla ma dam pa chos kyi rgyal po とは、ほかならぬ帝師 Phags

*⁸ Ratnarakṣita の冠称は「成就者にして大学者なる比丘」(D 101v1: grub pa brnyes pa'i mkhas pa chen po dge slong) とあり、梵本のもとは多少異なる。

*⁹ D1420, 101v1-3: de nyid kyi dngos kyi slob ma thams cad mkhyen pa'i dpal bzang pos rang 'gyur du mdzad pa las dus phyis yon tan mtha' yas pa dang ldan pa bla ma dam pa chos kyi rgyal po'i bka'lung dang | dpon chen kun dga' bzang po'i gsung gis bskul nas | bod kyi lo ts'a ba dge slong blo brtan gyis phu ri'i gtsug lag khang du bsgyur cing bcos te dag par byas pa'o ||

pa (1235-1280) を指す*10。

そして次の一人 Kun dga' bzang po は、第二代プンチェン（サキヤ派帝師直属の政務官最高職）としてサキヤ南寺大殿などの造営を指揮し、1281年に誅殺されたとされる*11。Kun dga' bzang po の在位期は 1270-1275/76年であるので、*Padminī* の改訂訳年はこの頃に限定される。折しもサキヤ派が元朝と福田・施主の関係を結んでチベット仏教世界の頂点に立ち、組織的な訳文改訂事業を促進していた頃である。

訳文改訂者 Blo brtan は、Shong lo tsā ba Blo gros brtan pa を指す。Blo gros brtan pa は、その実兄（Shong lo tsā ba rDo rje rgyal mtshan, ca. 1230-? after 1280）と共に梵文学者として当時名を馳せていた*12。また、*Padminī* のほかにも、いくつかのタントラ文献（D 1184, 1515, 2136, 3142）の訳出・改訂に関わっている。その中には、第三代プンチェン職の Zhang btsun を施主に迎えてカシュミールの Vimalaśrīmitra と共にサキヤ寺で訳出したものもあれば（D 1184）、ネパールで訳出したものもある（D 1515）。

以上、*Padminī* の翻訳事情は次のように整理できるだろう。つまり、Ratnarakṣita の本書著作年を一応 13 世紀前半頃と据え置くと、まずその直弟子 Sarvajñaśrībhadrā が同時代にチベット訳し、この初訳本を元にして、成書から半世紀ほど経た 1270-1275 年頃に、サキヤ派の帝師パクパおよび執政官 Kun dga' bzang po の要請のもと、Shong lo tsā ba Blo gros brtan pa が新訳を設え、訳文を制定したことが、この奥書から知られる。'Phags pa らの懇請年から訳出完成年までの間に差異を認めるとしても、訳出年は 1270 年代から大きく外れることはないだろう。

同様の施主と訳者の翻訳チームは、*Raktayamāritantra* の奥書からも確認される。そのトクパレス写本やラサ版の奥書は、Bla ma dam pa chos kyi rgyal po (= 'Phags pa) の懇請と、Kun dga' bzang po の財的支援によって、

*10 Cf. VAN DER KUIJP 2009: 27.

*11 Cf. 乙坂 1986, VAN DER KUIJP 2009: 27.

*12 Cf. VAN DER KUIJP 2009: 19.

Shong ston lo tsā ba Blo gros brtan pa が、Rāhulaśrībhadra と共にサキヤ寺大殿で訳出したと記す^{*13}。訳出年は同じく 1270 年代中盤以降となる。

3 *Padminī* の章立てについて

Padminī は *Samvarodayatantra* の章立てに準じているが、*Padminī* 自体は章名を「第 1 章註釈」などとしているので、ここでは便宜的に *Samvarodayatantra* の章名を列挙する^{*14}。

第 1 章	Adhyeṣaṇāpaṭala
第 2 章	Utpattinirdeśapaṭala
第 3 章	Uṭpannakramanirdeśapaṭala
第 4 章	Caturbhūtapañcākāraṣaḍviṣayadevatāviśuddhipaṭala
第 5 章	Candrasūryakramopadeśapaṭala
第 6 章	Pathapañcakanirdeśapaṭala
第 7 章	Nāḍīcakrakramopāyapaṭala
第 8 章	Samayasamketavidhipaṭala
第 9 章	Chomāpīṭhasamketabhūminirdeśapaṭala
第 10 章	Karmaprasarapaṭala ^{*15}
第 11 章	Mantrajāpaniyamanirdeśapaṭala
第 12 章	Mantrajāpākṣamālānirdeśapaṭala
第 13 章	Śrīherukodayanirdeśapaṭala ^{*16}
第 14 章	Vajrayoginīpūjāvidhinirdeśapaṭala
第 15 章	Pātralakṣaṇanirdeśapaṭala
第 16 章	Pañcāmṛtasādhanavidhinirdeśapaṭala
第 17 章	Maṅḍalasūtrapātalakṣaṇanirdeśapaṭala
第 18 章	Abhiṣekapaṭala
第 19 章	Mṛtyunimittadeśanotkrāntiyogapaṭala
第 20 章	Caturyoganirdeśapaṭala
第 21 章	Caryānirdeśapaṭala
第 22 章	Devatāpratiṣṭhāvidhipaṭala
第 23 章	Homanirdeśapaṭala

^{*13} Cf. VAN DER KUIJP 2009: 27. 他のカンギュル諸本は Kīrticandra と Yar klung lo tsā ba の訳本を伝える。

^{*14} TSUDA1974 に校訂されている章の名称は、原則的に、それに従い、それら以外は東京大学所蔵の写本 (Matsunami No.404) を参照した。

第 24 章	Karmaprasaraṣadhiprayoganirdeśapaṭala
第 25 章	Rasāyanavidhipaṭala
第 26 章	Vāruṇīnirdeśapaṭala
第 27 章	Mantroddhāra[ṇa]vidhipaṭala
第 28 章	Homavidhipaṭala
第 29 章	Tattvanirdeśapaṭala
第 30 章	Citrādirūpalakṣaṇanirdeśapaṭala
第 31 章	Caturyoginīnirdeśacatuścakrakramabodhicittasaṃkramaṇapaṭala
第 32 章	Balyupahāranirdeśapaṭala
第 33 章	章名なし*17

これらのうち、*Samvarodayatantra* の第 2-10、13、17-19、21、23、26、28、31、33 章は TSUDA1974、第 25 章は山野 2006、第 30 章は CUCUZZA2001 によって校訂出版されている。一方、*Padminī* については、第 21 章が種村 2009 により、すでに校訂出版されており、その他の章については、本研究班が順次校訂作業を進めている*18。

以下、*Padminī* 諸写本における各章のロケーションおよびチベット語訳(デルゲ版)、*Sadāmnāyānusāriṇī* 写本(Na)の対応箇所の対照表を示す。

著者不明の *Sadāmnāyānusāriṇī* は *Padminī* と関係の深いテキストである。両者の関係は、単純に比べると、前者が後者の縮約版のように見える。もしそうであれば、*Sadāmnāyānusāriṇī* は *Padminī* のあとに著されたと言える。しかしながら、詳しく内容を吟味すると必ずしもそうとも言えず、先後関係は現在のところ明確ではない。いずれにしても、*Sadāmnāyānusāriṇī* は *Padminī* を研究する上で必要不可欠な資料である。*Sadāmnāyānusāriṇī* には、ほぼ完本のサンスクリット写本が存在する*19。チベット語訳は

*15 TSUDA1974: Karmaprasarṣadhiprayoganirdeśapaṭala

*16 -herukābhyudaya-と修正すべきか？

*17 他の章のように、章末に、章名が記されていない。TSUDA1974: 165; iti śrīherukābhidhāne mahātantrarāje trilakṣodhṛtasahajodayakalpaśrīmahāsaṃvarodayatantrarājasarvayoginīrahāsye paṭhitasiddhe trayastriṃśattamaḥ paṭalaḥ samāptaḥ ||

*18 全体の翻刻は既に完了しており、第 1 章、第 13 章、第 22 章の校訂作業はほぼ終了している。

*19 11 葉目と奥書を含む最後の一葉が欠損している。

現存しない。

- Na NAK 3/716 = NGMPP A48/11, palm-leaf, incomplete, undated, *20
 Nb NAK 3/693 = NGMPP A936/11 (exps 74-76)*21, palm-leaf, incomplete, ネパール
 歴 566 (第 19 章のみ).
 I IASWR MBB-I-65, paper, incomplete, undated*22.

Chs.	MSS.				Tib.	SĀA
	T	B	N	Ra+b		
1	1v1	1v1	1.1	a1v1	1r1	1v1
2	6v3	10v5	20.14	a8v8	10v6	4r7
3	7v9	12v10	24.15	a10v8	13r5	5v8
4	10r1	17r1	34.15	a14v1	17v3	7v6
5	12r11	21v7	45.19	a18v8	22v5	10r7
6	14v3	25v1	55.18	a22v3	27r3	13v6
7	14v10	25v10	57.5	a22v10	27v4	14r5
8	15v3	27r7*23	60.14	a24r7*24	29r3	15r1
9	17r2	28v9	67.11	a27r1	32r5	16v2
10	17v7	31r7	71.6	a28r4	33v6	17r1
11	19v3	34v5	80.12	a30v3	37v4	19v1
12	19v7	35r1	81.10	a30v8	38r3	19v3
13	20r5	35v7	83.9	a31v3	38v7	19v8
14	24r3	42v6	102.13	-	47r3	20v4
15	24v6	43v10	105.13	-	48v1	21r5
16	25r3	44v3	107.11	-	49r5	21v2
17	25r8	45r3	108.15	-	49v5	21v5
18	30v6	55v6	135.11	b1r1*25	61v5	22r5
19	34v10	64r2	157.2	b6v7	70v7	22v4
20	35r10	65r1	159.12	b8r2	72r1	23v4
21	35v1	65r4	159.18	b8r5	72r3	23v5
22	35v7	65v5	161.6	b8v8	72v4	24r2
23	37v6	69v2	170.14	b13r9	77r1	24v2
24	39v4	73r7	180.6	b18r2	81r3	25r2

*20 Tucci が同じ写本の写真を撮っている。(Tucci's Collection no.3.5.4.)

*21 このバンドルには、22 のテキストが含まれている。それらは、おおよそ同時期に、何人かによって書写されており、仏教だけでなく、ヒンドゥー教のテキストも混在している。

*22 これは写本 (Na) のアボグラフである。

25	39v10	73v7	181.12	b18v4	81v4	25r8
26	40v2	75r1	184.16	b20r5	83r1	26r7
27	41v2	77r3	190.1	b22v4	85r5	27v3
28	42r2	78r3	192.9	b23v8	86r6	28r3
29	42r8	78v2	193.11	b24r9	86v5	28r8
30	43r7	80r7	198.6	b26v5	88v7	29v4
31	47r5	81v1	215.3	b36r4	96r6	31r6
32	47v11	89r2 ^{*26}	218.19	b38r3	98r3	32v1
33	48v4	90r7	222.6	b39v6	99v3	33r7

4 研究展望

最後に当該プロジェクトの今後の計画を簡単に述べることにより、本論文の結びとしたい。現在第1章、第13章、第22章の校訂作業をほぼ終えており、そのうち、第13章(前半)および第22章(後半)が本年中に出版される予定である。第1章、第13章(後半)、および第18章についても、近い将来に出版する予定である。最終的には、全体の校訂テキストおよび詳細な英訳註を作成した上で、モノグラフの形態での出版を計画している。全体を完成させるためには、*Samvarodayatantra* や *Padmini* のみならず、関連諸文献の広範な精読が必要となってくる。折に触れて、当該分野の識者の方々からコメント、批判等を頂ければ幸いである。

*23 B が T を写すときに、*saṃyojyatarjanī* まで写し、最後の1行分を飛ばして第9章を写し始めている。

*24 B が飛ばした1行文を欄外に赤字で書写していることから、この R は B を参照したものと考えられる。

*25 途中 *śiṣyapraveśavidhi* から始まる。

*26 章末に *triṃśattamaṭālavākyā* とあるが、*dvātriṃśattamaṭālavākyā* と修正すべきである。

略号表

Baroda	NAMBIYAR, Raghavan. <i>An alphabetical list of manuscripts in the Oriental Institute, Baroda, Vol. II</i> , pp. 1458 – 1467, "Bauddha-śāstra." Gaekwad's Oriental Series 114. 1950.
IASWR	Institute for Advanced Studies of World Religions
Matsunami	MATSUNAMI, Seiren. <i>A Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Tokyo University Library</i> . Tokyo: Suzuki Research Foundation, 1965.
NAK	National Archives, Kathmandu
NGMPP	Nepal-German Manuscript Preservation Project
Takaoka	TAKAOKA, Hidenobu. (ed.) <i>A Microfilm Catalogue of the Buddhist Manuscripts in Nepal, Vol. I</i> . Nagoya: Buddhist Library, 1981.
Tucci's Collection	SFERRA, Francesco. Sanskrit Manuscripts and Photographs of Sanskrit Manuscripts in Giuseppe Tucci's Collection. In: SFERRA, Francesco (ed.) <i>Sanskrit Texts from Giuseppe Tucci's Collection, Part I</i> . Roma: Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente, 2008. pp. 15 – 78.

参考文献

CICUZZA, Claudio

2001 Il Capitolo XXX del Saṃvarodayatantra, *Le Parole e i Marmi: Studi in Onore di Raniero Gnoli nel 2uo 70° compleanno*, 212-228, A cura di Raffaele Torella, Serie Orientale Roma XCII, 1, Roma.

倉西憲一

2012 *On the Manuscript NAK 3/716 (NGMPP A48/11): The Sadāmnāyānusārīnī, a Commentary on the Saṃvarodayatantra*, 『印度学仏教学研究』 60-3, (147)–(150).

2013 「インド仏教終焉期における大乘仏典受容の一例—顕密両修の学僧ラトナラクシタの著作を中心として—」, 『大正大学総合佛教研究所年報』 第35号, (209)-(224).

Forthcoming 「*Padminī* 第 13 章—校訂テキストおよび註 (1)」, 『大正大学総合佛教研究所年報』第 36 号, (2014 年 3 月刊行予定).

乙坂智子

2009 「リゴンパの乱とサキャバ政権」, 『仏教史学研究』29-2, 59-82.

PANDEY, Janardan Shastri

1994 *Bauddhastotrasaṃgraha*, Motilal Banarsidass, Varanasi.

静春樹

2012 「ラトナラクシタのガナチャクラ儀軌和訳研究」, 高野山大学密教文化研究所紀要 第 25 号, 150(21)–116(55).

種村隆元

2004 *Kuladatta's Kriyāsaṃgrahapañjikā: A Critical Edition and Annotated Translation of Selected Sections*, Egbert Forsten, Groningen Oriental Studies 19.

2009 「*Samvarodayatantra* 第 21 章 *Caryānirdeśapaṭala* に関する一考察—*Padminī* 第 21 章校訂テキスト並びに註—」, 密教学研究 第 41 号, 23–39.

forthcoming 「Ratnarakṣita 著 *Padminī* 第 22 章—Pratiṣṭhā セクションのサンスクリット語校訂テキスト—」, 『現代密教』25, (2014 年 3 月刊行予定).

津田真一

1974 *The Samvarodayatantra Selected Chapters*, Hokuseido Press.

VAN DER KUIJP, Leonard

2009 *On the Vicissitudes of Subhūticandra's Kāmadhenu Commentary on the Amarakośa in Tibet*, Journal of the International Association of Tibetan Studies 5, 1-105.

山野千恵子

2006 *A Critical Study of the Rasāyanapaṭala of the Samvarodaya Tantra*, 『智山学报』第 55 輯, (73)–(86).

(平成 25 年度科学技術研究費「註釈文献から見た後期インド密教における教理と実践の関係に関する研究」[基盤研究 (c), 25370059, 代表: 種村隆元] による研究成果の一部)